

月刊 社会保険 12

2020 VOL.845

一般社団法人
全国社会保険協会連合会

認知症とともに生きる
家族の物語

● 第8回 ●

いまの自分があるのは「お母さん」のおかげ

～こんなにも愛らしく思う認知症の妻との絆～

滋賀県／梅本高男さん・安子さん夫妻

NPO法人ハート・リング運動専務理事

早田 雅美

コロナウイルス感染症の影響

床から天井までガラスで塞がれ、真ん中にドアがついている。マスク越しに「お父さんだぞ！ お母さんわかるか？」と呼びかけてみるが、奥さんの安子さんの反応はみられない。マスクのせいで顔がわからないのか、それとも…。

梅本さんは昭和17(1942)年生まれの78歳、妻の安子さんは数年前に発症した認知症が進み、現在は特別養護老人ホームに入所している。子どもが生まれて以来、夫婦は「お父さん」「お母さん」と呼びあつてきた。

安子さんは現在要介護5で、ほぼ失語状態だ。コロナウイルスの影響で長く面会ができなかったが、4カ月の空白期間を経て、今年6月からガラスやアクリル板越しの面会が施設からやっと許可されたのだった。

コロナウイルスの問題が起こるまで、ほとんど毎日面会に通っていた梅本さんだったが、面会が許されたこの日まで「一日千秋」の思いで過ごしてきたのだった。

施設の人がさまざまなケアをしてくれていることはわかっているのだが、長く会えなかったことで、安子さんから梅本さんの存在が霞んでしまっていたら…。そう思うと、いてもたってもいられない気持ちだったのだ。顔色はいいようだが、梅本さんの声がけに反応の薄い安子さんをみて、今すぐにも抱きしめてあげたい衝動にかられた梅本さん

だったが、無機質なガラス板が非情にも夫婦を隔ているのだった。

仲がよい家族

梅本さんは、大手家電メーカーの主に商品開発部門に勤める会社員だった。冷蔵庫や自動販売機、アイスクリーム冷蔵庫、業務用エアコンなど、ものを冷やす部門を任せられ、定年5年前からは製造部門にもいた。

結婚以来仕事や仕事関係の付き合いは多忙を極め、家のこともお金の管理も安子さんにすべてまかせて、極端な話、自分の給料や貯蓄がいくらあるのかも知らなかったという。子どもは娘が3人。

子育ても勉強も安子さんが担当していた。お父さんは忙しくてたまにしか家にいない、そうした家のひとつだった。しかし、家族の仲はとてよく、同僚もうらやむ幸せな家庭だった。

安子さんの異変



定年になったら全国をSUV車でまわって夫婦で好きな各地の「滝」を見てまわろう、日本の美しい自然を見てまわろう、そう話していたという。梅本さんの定年後、その約束どおり夫婦で見えてまわったのは、



協会けんぽからのお知らせ
保険証の記載事項が変わります

令和2年版 厚生労働白書 —令和時代の社会保障と働き方を考える— (概要)

予防接種法および検疫法の一部を改正する法律案について

「循環器病対策推進基本計画」について

令和元年度 年金積立金の運用状況について —概要—

全国各地にある「日本の滝100選」のうちの約60カ所。燃えるような紅葉につつまれた秋の大雪山、奥入瀬、散歩中にシカやキタキツネと遭遇した北海道、摩周湖の美しい風景、忘れられない思い出は数えきれない。道の駅を利用してSUV車の中の寝泊まりが通例だったという。

四国へ旅をしたときのことだった。「トイレにいつてくる」と出ていった安子さんがいつまでも戻ってこないということが起こった。「随分遅かったな」という梅本さんに安子さんは照れ臭いような表情をしながらちよっと道に迷ったといった。

今を思えば、この頃が安子さんの認知機能に異変が現れはじめた時期だったのかもしれないと梅本さんは思っている。その頃から娘から「お母さんが



日本中を旅した梅本夫妻

在を知り、そこで認知症の家族介護に対するとんでも貴重な情報を得ることができるようになり、多くの介護仲間を持つことができたのだった。

「救われた」。梅本さんは、その後も認知症カフェや集いの場に積極的に参加して、介護仲間たちとわいわい情報交換しあう。

そこはまさに「宝の山」だったという。でも、家に帰ると現実に安子さんの介護が待っていた。ケアマネの勧めで、デイサービスも利用したが、初めて安子さんを伴ってデイサービスに行ったときに、「なんでこんな年寄りばかりのところになかなかいけないの!」と安子さんは気持ちが進まなかった。安子さんが受け入れ、慣れるまでに3カ月かかった。はじめは夫婦2人で通わせてもらい、安子さんの様子をみながら「ちよっと散髪にいつてくる」「今日は会社の会議」と理由をつけて、次第に梅本さんが抜けていくやりかたが効果的だった。

グループホームも申し込んだが、徘徊があり施設からお預かりできないと断られた。認知症も進み、おおむね5年間の在宅での介護の中で、3年間ほどは「徘徊」を伴う厳しい状況だった。安子さんの失禁も家の中でいつどこにしていってしまうかわからない。

施設に頼ろう

最後まで家で介護すると決めていた梅本さんだったが、肉体的、精神的な疲れは、もはや限界を超えていたのだった。疲れ切った梅本さんからは笑顔も会話も減った。鏡にでも写すように安子さんの

最近すこし変」という電話がかかってくるようになった。

電話で同じ話を何度もするというのだ。「70歳にもなればそんなことあるさ」、梅本さんはそう答えて取り合おうとしなかったが、やがて娘の声が陰しなくなりはじめ、病院で診てもらったほうがいいという話になった。

安子さんを伴って訪れたのは地域の成人病センターの「もの忘れ外来」だった。もの忘れ外来の文字をみて安子さんは怒り出した。「なんで私がこんなところに来ないといかんのか!」。この日は安子さんの同意がもらえず帰宅。その後夫婦で健康診断を受けようと説明して受診、診断はアルツハイマー型認知症。要介護1に相当するということだった。

助けを求めて

「アルツハイマー型認知症!」。梅本さんの頭は一瞬真っ白になった。その後安子さんに起こる異変は次第にエスカレートしていった。安子さんのつくろおかずが異常に甘くて食べられなくなったこともある(後でわかったことだが安子さんが塩と砂糖を間違えていた)。あんなに仲のよかった夫婦なのに、喧嘩が絶えなくなった。

その後梅本さんには一生忘れられない日がやってくる。安子さんの異変への対応で心理的な疲れがたまっていると感じていた矢先だった。2日ほど口論ばかりがつづいていた。その日、梅本さんを怪訝な表情で見つめた安子さんが突然「あんた誰や!」

表情も険しい。そんな中で現在入所している特別養護老人ホームの空きがでたという情報がくる。迷ったがこれを断ったら次にチャンスがいつまわってくるかわからない、というアドバイスを受けて入所を決断したのであった。

「馴染んでくれないかもしれない」。しかし、手際よく安子さんのケアをどんどんこなしていく職員たちの姿を見て、梅本さんの施設に対する不安は次第に消えていったのだった。服の着替え、入浴にいたるまで多くの人手でスムーズにながれ、なにより安子さんの表情が次第に柔らかくなっていくのだった。梅本さんは胸をなでおろした。自分に余裕が戻ってきたことで、昔のようにものごとをポジティブに考えられるようになっていった。

たしかに施設に預けてはいる。しかし、ほとくの介護はおわたたわけではない! その日以来、毎日安子さんのもとへコンビニで買ったお弁当を持って通う生活がスタートしたのだった。かつて安子さんとめぐった旅行先で撮った写真を見ながら、一緒に食事を楽しむ。田んぼの多い施設のまわりを一緒に手をつないで散歩しながらタンポポをつんだり蝶を見つたりする。

一緒に歳を重ねよう

「がんばったな」「えらかったね」、どんな些細なことでもほめてあげることで安子さんはうれしそうに表情をしてくれる。自分が優しく話すことで安子さんも優しくなれる。元氣だったときには恥ずかし

「ここは私の家や! 出てけ!」と言い出した。「なにをいつている、この家はわしががんばって建てた家だろう! お前こそ出てけ!」もみあいの末、梅本さんの手はあやや安子さんの首にかかろうとしていた。「ぼくはなにをしてるんだ!」家を飛び出した梅本さんはそのまま役所に助けを求めた。「助けてほしい、このままでは妻を殺してしまいうだ!」。

その後地域包括支援センターの計らいで、安子さんは介護サービスを受けることができ、ケアマネジャーやヘルパーなどが家に入出入りをするようになる。「まずは認知症について知らなければどうにもならない」、認知症専門医の講演を聞き、介護本を読みあさり、インターネットでも情報を漁った。

認知症は薬を飲ませても治らないことは理解できたが、介護本などはどれも似たような内容で腑に落ちるものは少なかった気がする。

1人ではないことを知る

そんなあるとき、ケアマネから自治体の「男性介護者のつどい」という集まりを案内される。おそろおそろ訪れた梅本さんを「介護の先輩」たちが歓迎して受け入れてくれ、同じような悩みを経験してきた先輩たちの話に、1人で抱え込んでいた梅本さんの悩みは、糸をほぐすように軽くなっていった。

介護の状況も対応の仕方「十人十色」ではあるが、話を聞いて理解してもらえただけでもとてもありがたかった。さらに「認知症の人と家族の会」の存

てできなかったがハグしてあげると安子さんは離れようとしなかった。

「とても不思議な気持ちですが、今はお母さんがものすごくかわいいと感じるんです」。認知症介護はたしかに苦勞つづきの連続だったが、梅本さんはおかけでとてもたくさんのお話を学ぶことができたという。

現在は家族の会の県副代表として講演の依頼も少なくない。介護を通じて実に多くの人とつながることができている。

「ありがとう。いまの自分がいるのは全部お母さんのおかげ」。長生きしてな、これからも一緒に仲よく歳を重ねていこう…。心の中で毎日そう語りかけているという。

(協力)公益社団法人認知症の人と家族の会



夫妻近影